

[成果情報名] 「静丸早生」のす上がり発生果の軽減

[要 約] 「静丸早生」のす上がり（粒化症）は、大きい果実ほど発生果率やす上がり度が高くなるため、L～Sサイズの果実を生産することで、す上がり（粒化症）の発生は軽減できる。

[キーワード] ウンシュウミカン、す上がり軽減

[担 当] 静岡農林技研・果樹研セ・果樹生産技術科

[連絡先] 電話 054-376-6153、電子メール kaju-kenkyu@pref.shizuoka.lg.jp

[区 分] 果樹

[分類] 技術・参考

[背景・ねらい]

本県のカンキツ生産においては「青島温州」の栽培面積が多く、11月下旬から12月に収穫作業が集中することが規模拡大を阻む要因のひとつとなっている。当センターでは、収穫労力の分散に向けて収穫時期が異なる高品質カンキツを育成してきた。その中のひとつ「静丸早生」は、収穫時期が9月下旬から10月で食味良好な極早生温州であるが、現地実証ほです上りの発生がみられたことから、軽減策を明らかにした。

[成果の内容・特徴]

- 1 「静丸早生」果実のす上がりは、砂じょうが白色化しゲル化する生理障害の粒化症、日焼けによる高温障害の砂じょう乾燥症の2種類の症状が発生する（図1）。
- 2 L～Sサイズの果実には粒化症の発生がほとんどみられない（図2）。枝別摘果法は果実を群状結実させ肥大を抑えることによって、粒化症の発生率を低くできる（表1）。

[成果の活用面・留意点]

- 1 「静丸早生」は極早生品種としては樹勢が強いため、樹勢を抑え、着果を確保する管理を行う必要がある。
- 2 砂じょう乾燥症については、樹冠外周部の果実に対して日焼け対策を行う必要がある。

[具体的データ]



図1 「静丸早生」のす上がり症状
 左：粒化症
 右：砂じょう乾燥症

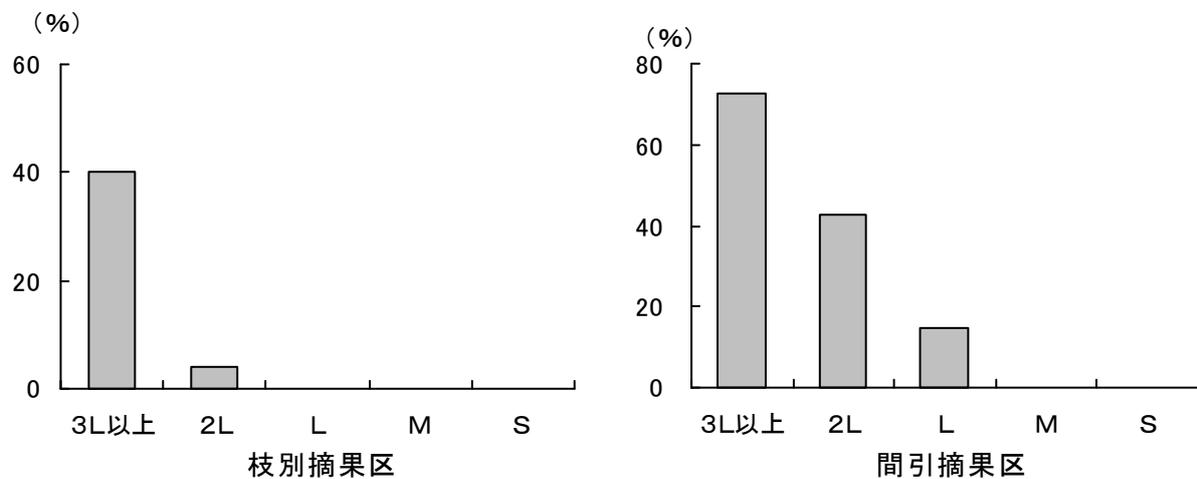


図2 摘果方法の異なる果実の階級別す上がり（粒化症）発生果率

表1 摘果方法の違いがす上がり（粒化症）発生に及ぼす影響

試験区	す上がり発生果率 (%)	す上がり度
枝別摘果	4.4	0.06
間引摘果	23.5	0.31
有意性 ^z	**	—

^z : χ^2 検定により**は危険率1%で有意差あり

[その他]

研究課題名：カンキツ経営を強化する県オリジナル品種・系統の安定生産技術の確立
 予算区分：県単
 研究期間：2015～2017年度
 研究担当者：濱崎櫻、中村茂和、吉川公規、古屋雅司
 発表論文等：なし